

# ひまわりからの メッセージ

75号

2017.7.3

NPO ひまわりの花内  
西濃圏域  
発達障がい支援センター  
発行人: 中野にみ子

## 柚木 復先生から

### 教えられたこと



大垣市の船町燈台の前にある「とうだいまえ」というレストランは、障がいのある方がお勤めしていらっしゃるレストランで、同僚の先生に誘われて入ってみました。

感じの良い店内で美味しいランチをいただきながら、遠い昔に訪ねたスウェーデンのクラサドゴンゲンというレストランのことを思い出していました。岐阜大学の柚木復先生とご一緒した北政の旅は十日程でしたが、そのレストランでいただいたパンは、他のどのレストランよりも美味しく、ダウン症の方達など皆さんが本当に生き生きと働いておられたのが印象的でした。「日本にもこんなレストランが作れたり良いね」と話し合った日のことを思い出し、柚木先生にお会いしたくなつて一冊にまとめられている先生のアルバムと書簡をひもといってみました。

柚木先生は、大学の教授でしたが実践家でもあり、「あしたの会」という後援団体を起ち上げ、作業所や施設の開設に奔走された方でした。岐阜大学の卒業生でもない私でしたが、「来る者は拒まず」の先生に多くのことを学ばせていただき、特殊教育特別専攻科の一期生として、一日の仕事を終えてから岐阜大学まで通い、養護学校教諭の専修免許を取得させていただいたのも先生のお蔭でした。先生は、子どもたちを理解するのは、心理検査などではなく、目の前にいる子どもとじかに向き合い、寄り添うことが大切であると説かれました。私もそう思います。心理検査の数値だけが一人歩きすることは避けなければなりません。けれど「若い人たちには心理検査の学習も必要です」と言いつつ、研修会には心理検査の資料も必ず入れ込んだものでした。きっと先生は苦笑いしながら、頑固な私を許して下さっていたように思います。

先生からの最後の書簡は、文字が乱れながらも末期がんと闘われる先生の思いが痛い程伝わってきます。とくになる直前まで、障がいのある子どもたちを愛し、働きつづけられた先生、私は、まだまだ足元にも及ばないなあと思います。でも、アルバムの中からの先生のあたたかい眼差しに、また力をいただいた気がしています。梅雨明けも真近です。

S・E・N・S 研修会に出席して

「気になる子を

すてきな個性に変える方法」

日野市 石坂 光敏先生



先週の日曜日、高山まで出かけました。S・E・N・S というのは、特別支援教育士と呼ばれるLD学会の認定資格のことで、資格を取れば終生というものではなく、ポイントを積み上げ、五年毎の更新が義務づけられています。私も今年が更新の年でもあり、たまたまこの日に予定がなかったこともあって出かけました。

今回は、拡大研修会で、会員以外の参加も呼びかけたのですが、出席者は思ったより少なく、残念に思いました。

日野市には、昔から島田療育園という重度心身障がい児と言われる子どもたちの施設があり、医療と連携のある地域であったと思いますが、現在の日野市は、市全体で子どもの発達を支えているというところ、教育部門と福祉部門が一体となって窓口が一本化されているというところでした。

講師の石坂先生は、髪型もユニークで、その経歴もユニークでした。スペイン語が得意で教師になる前は政府関

係の通訳もされていたということで、おそらくそういう経歴が教育にも生かされているのだろうと思われました。

教育のユニバーサルデザインを目指して日野市では「ひのスタンダード」という取り組みが行われているとのことでした。

### ①場の構造化(学級環境)

- ・教室の物は一つ一つ置く位置を決める。
- ・教材の場所や置き方などが一目で分かるように整理されている。
- ・座席の位置は個々の特徴に合わせたものになっている。
- ・掲示物などの視覚的刺激が少ない。
- ・教室の前面の壁の掲示物は必要最小限に。
- ・教室の棚等には目隠しをするなど、余計な刺激を排除している。
- ・聴覚的刺激(騒音、雑音など)を排除している。
- ・刺激し合う子をお互いに離れるような座席にしている。

この様なことは、学校訪問をさせていただと、以前に比べてずいぶん考えられるようになってきていると思います。石坂先生は学校目標なども不要だと言われましたが、その点は、まだまだかましません。予定黒板の部分は

カーテンで見えなくするといったこともあるようで、極力、余分な刺激となるものは排除していきうとされていきました。

そういえば、黒板の所から斜めにロープをはって、九九やひらがな表をぶら下げておく光景も少なくなつたことも日々感じていきます。

教室という場の構造化以外にも②指導方法の構造化や③クラス内でのルールの明確化などにも言及されました。石坂先生は通級指導教室を担当されていて、その指導内容は「自立活動」の六区分二十六項目のうちの「心理的な安定」と「コミュニケーション」を中心に行っているとのことでした。石坂先生の教室にはボールプールなども置かれていて、岐阜の通級教室とは、ちがつちがつていふと思いましたが、「教育」というより療育的なのかかわりを大事にしている」といふお話でしたので、なるほどと思つたことでした。ちなみに先生の教室に通ってくる子どもたちの学級でのようすは

- ・ 休み時間、一人でずいずい。
- ・ 授業中、別なことをしている。
- ・ 授業中、無断で離席、外出する。
- ・ 宿題をやっていない。
- ・ 教室の授業に参加しない。
- ・ そうじ当番、給食当番をしない。



・ 給食のおかわりができません。見本も食す。  
・ すぐキレて破壊、他害、授業妨害がある。

・ 買物学習中に他人に暴言を吐く、スーパーで暴れて陳列物をなぎ倒す 等々

どこでも見かける光景のようです。ただこれらのことを発達心理の視点で見ると、要因分析をし、指導に生かしていくという点は学んでいきたいものです。

ことばのかけ方として「何やってるの？」「どこへ行くんだ？」というように疑問詞を使ったことばは、一番心に残らないとおっしゃっていました。また「廊下を走るな！」というような否定命令も子どもたちの心には届きませ

ん。では、どんな言い方が良いでしょう。先生は「主語が私になるような言い方と言われました。つまり、「今、くしてくれ」といいな」といふような言い方です。けれど、そこに信頼関係がなかったり、どんなことばもかけなくても、子どもたちの心には届かないかもしれません。

発達障害の場合、注意、叱責、罰（負の強化子）では改善せず、良い行動を強化することによるのみ、不快を受け入れられるようになると言われますが、本当にその通りで、教師の叱責は教育的虐待にあたる場合もあるということばも印象に残りました。それにもう

つ石坂先生の講演の中で印象に残ったことは、「メタ認知」ということばです。聞かれたこと、ありますか？、

- ・ 自分のことを理解する力
- ・ 知っていることと、知らないということを知る力
- ・ 自分と周囲との関係を察する力
- ・ どこが大切で、どこが不必要かわかる力
- ・ 自分の意図と他者の意図との一致、または、「ずれ」を知る力
- ・ TPOに合ったことばを使い分ける力



つまり、自分の認知活動を点検し、吟味し、修正し、コントロールして、より良いものにしていくという認知システムのことです。簡単に言うと、自分のことを少し離れた位置からながめて、修正したり、見守ったり、周りがどう思っているのかを察知したりしていくことのできる自分がいるかどうかということなのです。

皆さんはいかがですか？

自分は正しいが、相手がまちがっていると常に言っている人や、他の人がアドバイスをして、「でも」と、「でも」ということばで自己弁護をくり返す人などは、メタ認知が育っていない人だと言えます。そして、そういう大人は、どの世

界にも少なからずいます。ASDの子どもたちの弱さと、ころでもあります。

人とかかわる職業についている人の中にもいらっしゃる。困るのは、子どもたちが、その人の本質を見抜いてしまふことであると思えます。だから、私たちは、もう一度自分をふり返ってみる必要があると思ふのですが……いかがでしょうか？

五時間にもわたった話の骨子をお伝えするには、私の作文力が追いつきませんが、先生のお話を聞いて、教育の根底、子育ての根幹をなすものは、やはり、子どもたちに注ぐあなたかな、包み込む愛情だと思いました。先生は、「教育と療育の折衷」ということばを使われていました。情緒的な安定なくしては何も始まらないのです。愛着障害の子どもたちを生み出さないのは家庭のあり方でしょうか。そうなるしまった子には、一対一の関係性が第一でしょう。さあ!! また、次の一步を!! と思いました。

お知らせ

八月のセンター親の会はお休みです。次回は9/11です。休み中のSOSは次の番号へ!! ただし、Cメール返信はできません(ごめんね) 090-9228-7395